

サブウェイ

佐野 広実

第四話 誰が捨てたのですか

一

トイレはきれいに使いましょう。

わざわざそういった張り紙をしても、なかなかきれいに使ってもらえない。地下鉄のトイレにかぎらず、公衆トイレを汚しても気にしない者は、自宅のトイレを汚しても気にしないのだろうか。

そんなはずはない。

ここは自分の領分りやうぶんと**思**っている場所のトイレは、きれいに使っているに違いない。自分とは関係ない**と**思っているから、いくら汚しても気にしないの**だ**ろう。

明美あけみたちが地下鉄内の私服警備員として勤務中に利用するのは、当たり前だが地下鉄内のトイレである。

利用するだけでなく、それもまた一種の警備にほかならない。トイレは密室になりやすいから、そこに押し込められてしまえば何らかの犯行が起きてもなかなかわかりにくい。盗撮カメラが設置され

ているかいないかということも、チェックすべき事項だ。

定期的に清掃せいそうされるが、それだけでは注意が行き届かないのだ。

研修時に、トイレについての警備も説明を受けた。非常に個人的な場所でもあり、なにか異状があったときの対応の仕方には気を付けなくてはならない。

トイレは事件が起きる場所。

穂村明美ほむらは特にそんな風に思っていた。

この仕事についてしばらくして、トイレで乗客を救ったことがあったからだ。

用を足しに個室へ入った乗客が、ドアに鍵をかけたとたん貧血ひんけつで倒れてしまった。そのとき偶然にも明美はトイレに入って化粧を直していた。誰かがトイレに入ったのは気づいていたが、すぐに個室のドアにぶつかって倒れ、低くうめくような声が聞こえたのだ。外から何度か声をかけると、やっと返事があり、本人が鍵を外したので中に入って様子を見て救護班きゆうごはんを呼んだ。

トイレに誰もいなかったら、気づくのに時間がかかっただろう。貧血だったからいいようなものの、脳梗塞のうこうそくや心臓発作しんぞうほっさだったら命にかかわる。

一度そういった経験をしたことがあったから、トイレは事件が起きる場所だと言いつけさせるようになっていた。

じつさい、多目的トイレをいかがわしい「目的」で使用する者もいるし、これは地下鉄内のトイレではないが、どこかのフアンド会社の社長が資金繰りに困り、危ない関係の金に手を出した結果、公園のトイレで「自殺」していたのが発見されたニュースを見たこともある。

まさに事件が起きるのだ。

その日、明美は千代田線、丸の内線、大江戸線の担当だった。

遅番で、そろそろ午後八時になろうとしていた。渋谷の詰所に戻ろうとして、乗っていた千代田線を表参道で銀座線に乗り換えるところだった。

日曜日の夜だったが、まだ乗客はかなり乗り降りをしていた。九月に入っても夏休み気分が抜けていないカップルや家族連れの姿もかなりあった。

このまままっすぐ詰所に戻って、それからいつものように仲間の待っている「エルニーニョ」に行くつもりだった。

季節は秋になったが、まだまだ暑い。半日、冷房の入った地下鉄に乗っていたとしても、汗で化粧崩れはする。しかもきょうは東京ドームでイベントがあったらしく、夕刻には警備員に無線で応援が呼びかけられた。周辺の混雑するホームや車両内でトラブルが起き

ないように注意を払い、おかげで汗まみれになっていた。

詰所に戻る前に、化粧を直しておこう。

思いついてトイレに向かったとき、入口のところ、中から出てくる若い女性とすれ違いざま肩がぶつかった。

「すみません」

女は顔を隠すようにして短くあやまり、走り去っていった。

言葉に独特のイントネーションがあり、見たところアジア系の女性だった。ウェーブのかかった長めの髪、伏し目にした横顔は整っていて頬骨ほおぼねが高い。灰色のバックパックにジーンズ姿。黄色のポロシャツ。

それだけ見て取って、明美はトイレに入ってしまった。

ほかに誰もいない。まだこの時刻はいいが、深夜近くになると改札や事務室から離れた場所に設置されているトイレは危険が増す。

犯罪ばかりでなく、男性用トイレなどでは泥酔者でいすいしやが寝込んでしまったりもする。女性にもたまに悪酔いしてトイレで倒れている者がいて、休日前の夜に多い。駅の事務員には、そういった乗客を介抱かいほうする仕事もあるというわけだ。

いまのところ私服警備員が動いているのは午前九時から午後八時までだが、本格的に導入されれば終電近くの泥酔者を扱う必要も出てくるだろう。

ため息をつきつつ、洗面台に向かって立ち、思わず苦笑した。
バックパックにジーンズ姿。

髪の毛は短いが、いまさつき出て行った女性と似たような恰好だ。
年齢もほぼ同じか。

着飾って休日に恋人とデートをする者など、一握りの人間に過ぎない。

きょうもやつと終わる。

一年近くこの仕事を続けてきて、最初のうちは覚えることも多かった。慣れるにつれて、コツをつかんできたのはよかったが、うっかりすると気がゆるんだりする。しかも残暑ときていた。仕事そのものは地下鉄に乗り続けるだけの単調なものだが、警備をするのだから気を遣うのは当然だった。

このところ疲れている。夏バテなど今までのことがなかったが、環境が変われば、体調も変化する。

鏡に映った自分の顔が、そう訴えていた。

バックパックを洗面台の横に置いて、もう一度ため息をつく。
リップを取り出し、唇にあてようとしたとき、背後に気配を感じた。

振り返ると、トイレのドアが並んでいるだけだ。どれも開いていて、誰も用を足している様子ではない。

だが、気配があった。

息をひそめ、バックパックを両手で抱え、防御の態勢を整えた。護身術は研修で受けているとはいえ、実際に使ったことはない。

並んでいるトイレをひとつずつ覗いていく。

どこにも人の気配はない。

一瞬心霊話が思い浮かんだ。

地下鉄にもご多分にもれず、その手の都市伝説がいくつかある。

たいていそういった話を仕入れてくるのは、飲み仲間のひとりである原口由紀はらぐちゆきだった。

上野や新橋といった駅には、いまでは使われていないホームがある。それは事実だが、そこに東京大空襲で亡くなった者たちの亡霊ぼうれいが出るとか、ホームドアがつけられる前には、ある駅のホームの端に立っていると、以前飛び込み自殺をした女性の姿が現れ、そこに立っている者を飛び込ませようとして腕をひっぱるとか。

いま明美のいる表参道のトイレにそんな話があると聞いたことはない。いや、そもそも心霊現象のようなものは、単なる気のせいにすぎない。精神的に疲れているとき、勝手にこちらがなにか異様なものを見たと思ってしまうのだ。

それくらいの常識は、明美にもあった。

だが、気配の正体がわからないのは薄気味悪いことに変わりなか

った。

いちばん奥のトイレの前まで行くと、なにかがくちやくちやと音を立てているのがはっきりわかった。

気のせいではない。

動物か、あるいは虫のたぐいか。悪臭はしない。

おそろおそろ中を覗くと、荷物を置いておくスペースにひと抱えほどの段ボールが残されていた。音はそこから聞こえてくる。

思い切って中に入り、段ボールを覗き込んだ。

二

すぐさま警察と救急隊が呼ばれ、明美は表参道駅の事務室で警察から事情を聞かれた。

「顔は、覚えていないんですか」

「はっきりとは。ただ、言葉の様子からして外国人だったように思います。声を聞けばわかるかもしれません」

「声ですか」

「高めのハスキーな感じでした」

「なるほど」

聴取を担当した若手の制服警官はため息をつきつつ、手帳を見直

していく。

こんなことになるなら、もっと注意して顔を確認しておくべきだった。やはり集中力が落ちているのだろう。

「わかりました。では、またなにかありましたらお願いすることがあると思いますので」

警官はそう言って立ち上がった。

「具合はどうなんでしょう」

見上げて尋ねると、警官はまた手帳に目を落とした。

「救急隊の話では、特に衰弱すいじやくをしていた様子はないとのことでした。二、三日病院で容態ようたいをみるそうです」

近くにある病院の名前を警官はつけ加え、敬礼して事務室を出て行った。

「大変でしたね」

女性の駅員が麦茶を紙コップに入れて持ってきてくれるながら、明美をねぎらった。

大変というより、驚いた。

正直なところを言えば、そう感じていた。

段ボールの中にはタオルが敷かれ、そこに赤ん坊が眠っていたのだ。

目にしたとたん、あつけにとられた。「捨て子」という理解より

先に、まずどうすればいいのかわからず、すぐに無線で連絡を入れた。

事件現場は証拠保全のために手を触れるなどよく言われるが、赤ん坊をこのままにしておいていいとは思えなかった。

とはいえ、下手に抱きかかえたりして泣き出されては困る。

あらためて段ボールを覗き、異状がないか、たしかめた。

生後どれくらいなのか、明美には判断がつかなかった。髪の毛は生えそろっておらず、眠ったまま口元を動かしていた。ベビー服はピンク。

そこでやっと「捨て子」だと頭で理解した。なにか身元の手がかりになるようなものはないかと箱の中を見ると、足元に紙片があった。

——マリアです　ごめんなさい　おねがいます
たどたどしい字で、そう書かれていた。

文字の拙つたなさと名前の響きからいって、外国人かもしれない。

よくわからなかった。

そこへ女性職員が走りこんできて、明美に声をかけた。私服警備員の身分証を提示すると、ともかくここから出そうということになった。傷害事件などではないから、そこまで現場保全は必要ないだろうという。

トイレの前に段ボールを慎重しんちょうに抱えて出ると、警察と救急隊が
駅員に導かれてこちらにやってくるのが見えた。

手早く救急隊員が赤ん坊の様子を診る。そのあいだに明美は警察
官に状況を説明した。

いったん事務室で待っていてほしいと言われ、明美は従った。

そのあと救急隊が赤ん坊を病院に搬送し、警官は現場の状況を確
認していたようだ。

十分ほどして警官が事務室にやってきて、詳細に事情を訊かれた
のだった。

おそらくトイレの入り口ですれ違った女性が置き去りにしたのだ
ろうと説明したが、顔までは覚えていなかった。ただ、高めのハス
キーな声でイントネーションが日本人らしくなかったこと、赤ん坊
と一緒に入っていた紙片に書かれた文言から、外国人女性が置き去
りにした可能性が高いことは確かだった。

「二年くらい前にも、あったんですよ、あそこ」

女性の駅員は、声をひそめてそう告げた。

「そのときは男の赤ちゃんで、生まれてすぐだったんです」

「親は見つかったんですか」

女性駅員は悲しげな表情で首を振った。

「見つからなかったらしいです。結局施設しせつに行ったみたいで」

そのときには目撃者はいなかったが、今回は明美が置き去りにしたとおぼしき女性を目にしている。ぼうっとしていた自分を「しか」りつけたかった。せつかく女性を目撃しているのに、赤ん坊が施設に行ってしまうことになったら。

そう思うと、女性を見つけ出すのは自分の責任だと感じた。

手にした紙コップから麦茶をひと息に飲み干すと、明美はともかく詰所に戻ると言い残して事務室を出た。

一時間ほど遅れて点呼を終えると、三木みき統括官はうなずいた。

「防犯カメラで追跡できるかもしれないが、地下鉄構内を出てしまったあとは追跡がむずかしいだろうな」

「はい」

明美も道々そのことは考えていた。

「たとえばよくないが、犯罪者は犯行現場に戻ってくる、とよく言われている。その女性がやむを得ない事情で赤ん坊を置き去りにしたなら、きっと近くまで戻ってくるだろう。赤ん坊がどうなったのか、気になるはずだ」

たしかにそうだ。

「もしかすると、そ知らぬふりで駅員に訊いたりするかもしれませんね」

「しばらく表参道駅には注意してみてほしい。配属も表参道駅を通る三路線に回すよう手配する」

「わかりました」

——なにしろ、目撃者はきみだけだからな。

三木の言い方は、言外にげんがいそう言っているようにも聞こえた。

そこでひとつ思いついた。

「あの、こういうのはどうでしょうか」

赤ん坊の発見されたトイレの前に、貼り紙をするのだ。一見すると目撃者はいないかといった文言を記すのだが、その中に赤ん坊の収容されている病院名を明示する。

三木が関心を示した。

「なるほど。もし置き去りにした人物が本当に気にかけているなら、病院に顔を見せるかもしれないな」

警察にも連絡しておくかと三木は告げた。

詰所を出ると、まちむら町村、おくの奥野の三人と作っているグループプランに連絡が入っていた。

それぞれ明美が発見した赤ん坊を心配していた。無線で通報したから、三人にも情報は伝わっている。

「赤ちゃんの名前はマリア。元気なようです」

そう返事をして、今夜は「エルニーニョ」には行かないとつけ加

えた。

飲む気分にはなれなかったのだ。

三

翌日は非番だったから、午前中十キロのジョギングをこなし、午後からマリアの入院している病院に行くことにした。

表参道駅から少し歩いたところにある中規模の総合病院だった。受付で名乗り事情を話すと、しばらく待たされた。

「失礼ですが、どちらさまでしょうか」

待合室にあるシートに腰をかけていると、背後から声がかかった。振り返ると三十代らしい女性がかがんでこちらに視線を向けていた。髪の毛は短めで、エプロンをつけている。三日月のような目は微笑ほほえんでいるが、警戒けいがいしている気配があった。

もう一度名乗り、マリアを発見した者で、地下鉄の私服警備員をやっていると言明した。

「失礼しました。もしかすると母親がここに現れる可能性もあったもので」

そう詫わびて、高倉美智たかくらみちと名乗った。小児病棟の看護師だという。

高倉は明美を四階にある病室へ案内してくれた。

「まだ保育器に入っています」

連れられて行った部屋は温度調節と換気が行き届いていた。入ったと同時に吸い込む空気が違うのが、すぐにわかった。

左右に何台もの保育器が並んでいて、それぞれに生まれたばかりのこどもがあおむけに入れられていた。足首には名前などのデータが書き込まれたアンクレットがつけられている。

「こちらへ」

高倉が導き、明美は一番窓際の保育器のところまで進んだ。

マリアは、そこにいた。昨夜見たときは光のせいだったのか、マリアの顔色は青白く感じたが、いまは血色がいい。相変わらず口をわずかに動かしつつ、眠りにについている。アンクレットはつけていないが、点滴の針が左手の甲につけられていた。

「発見が早かったので、脱水症状もなかったようです。少し栄養不足が目だつたらしいですが、体調に問題はないと先生がおっしゃっていますました」

覗き込んでいる明美に、高倉が説明した。

「生後どれくらいなんですか」

「生後六か月くらいだそうです」

赤ん坊を見かけることはあっても、まじまじと注視したことはない。あらためて目をやると、「不思議な生き物」という印象だ。

「一緒にあった置手紙には、マリアという名前だとあったそうですね」

高倉の問いに、明美はうなずいた。

「苗字は書いてなかったんですが、おそらくダブルなんだと思います」

昨夜すれ違った女性の様子からして、おそらく母親が外国人なのだろう。高倉によれば、出生届が出されていたとしても、そこから身元を割り出すのはむずかしいという。ましてや届け出てない可能性が高いらしい。

「どういうことですか、それ。病院で生んでいないってことですか」
「そうです。ですから無戸籍かもしれません」

無戸籍。

初めて耳にする言葉だった。

通常であれば、妊娠と診断されると役所へ行ってさまざまな手続きをするよう促される。母子手帳を渡され、月ごとの検診や体調を記したりして出産を待つ。そして出産後には出生届を出すことで、赤ん坊の検診や予防接種などの通知が来る。

ところが、役所へ話を持っていかず、医師に定期的にかからなければ、妊娠したことも出産したことも知られないままだ。出産して出生届を出さなければ、戸籍に載らないことになる。マリアという

名前も、勝手につけただけで、戸籍上は意味をなさない。

無戸籍というのは、そういうことだという。

「けっこう多いんです。大半は未婚女性ですけど、妊娠しても生む気がないとか、相手が逃げてしまつて生める状況じゃないとか。でも、もたもたしているうちにおろす時期を逃してしまう。医者に行かずひとりですんでしまつて、それでも出生したことを届け出ない。いろいろ事情はあると思いますが、父親や母親になるっていう自覚がない人って、いるんですよ」

「ということは、この子は社会的に認知されていないということですか」

高倉はため息をつきつつ、うなずいた。

「戸籍上は存在しないってことです。戸籍に載っているかどうかでしか人を判断しないっていうの、どうかと思いますけどね。現実にはここにひとり赤ん坊がいるのに、戸籍にないから福祉制度から外され、面倒見る必要はないっていうんじゃない、ひどすぎます」

たしかに、高倉の言う通りだろう。しかも、マリアのように捨てられた場合、施設に送ってしまったらそれで解決という「福祉制度」でいいのかどうか。

置き去りにした母親らしき女性を必ず見つける。

明美はあらためてそう思った。とはいえ、手がかりは皆無に等し

い。ただ、高倉の話聞き、マリアの寝姿を目にしてそう思わずにはいらなかった。

「なにかあったら連絡いただけると助かります」

明美は自分の連絡先をメモに書いて高倉に渡した。

「見つかるでしょうか」

メモをエプロンのポケットに入れつつ、高倉が不安げに尋ねた。

「遠くから来たとは思えませんし、もし心配しているなら、置き去りにした場所に戻ってくるかもしれません」

明美は三木の言葉を受け売りした。

また様子を見に来ると言って部屋を出かかったとき、部屋の入り口からミッチーと呼びかけるひそめた声が上がった。

小学校低学年くらいの女の子がパジャマ姿で体半分をのぞかせていた。乳歯にゅうしが抜けて上の前歯が一本ない。その顔がにっこり笑っている。

高倉があわてて駆け寄ってかがんだ。

「だめじゃない。まだ歩き回っちゃいけないって朝比奈先生あさひなに言われてるでしょ」

「だってミッチーすぐ帰ってくるって言ったのに、ぜんぜん来ないんだもん」

「ミッチー」は高倉の愛称らしい。

「ほら、ご挨拶して」

女の子の肩を抱えて、明美の方に向かせた。

明美もかがみこみ、視線を同じくした。

「こんにちは」

物おじしないらしく、誰だろうという興味が、その目には満ちている。

「わたし、萌香^{もか}。橘^{たちばな}萌香。これ家来^{けらい}のミヤビくん」

手にしていた熊のぬいぐるみを掲げてみせた。かなり長い間一緒にいるらしく、もとの茶色⁺が擦り切れてくすんでいた。

「地下鉄の警備員さんよ」

高倉の言葉に、萌香の目が見開かれた。

「すごい。わたし地下鉄乗りたい」

「いつか乗れるわよ。さ、ベッドに戻りましょ」

高倉にうながされ、萌香は手を取られて歩いていく。

「よかったら、のぞいていきませんか。すぐ近くの部屋なんです。

お客さんが来てくれるとみんな喜びますから」

高倉に言われ、上目使いで萌香からおおいでよと言われては、このまま帰るわけにもいかない。

明美はうなずいてついていった。

小児病棟には長期入院をしているこどもたちの部屋が用意されて

おり、高倉が向かったのはそこだった。

高倉と萌香とともに部屋に入っていくと、歓声かんせいが起きて数人のこどもたちが高倉の前に近寄ってきた。

「お客様にご挨拶あいさつして」

取り囲んできたこどもたちが、明美に向かって口々に挨拶をした。

「こんにちは。穂村っていいます」

元気のいい声に圧倒されつつ、明美はこたえた。

「地下鉄の人だよ」

萌香がほかのこどもたちに説明してくれる。

萌香を入れて六人のこどもは、短い者で一年、長いと三年近くも入院しているという。ほとんどここで育ったという子もいるらしい。

「難病のこどもたちで、完治して退院できる子の方が少ないんです」

そう囁ささやかれて、あらためてこどもたちに目をやった。一見するとどこも悪くないように元気だが、小児がん、心臓疾患、免疫不全といった病気を持っているという。萌香という女の子は心臓疾患で、ドナーを待っているのだそうだ。あまり動き回るのはよくないらしい。

萌香をベッドに寝かしつけて戻ってきた高倉は、苦笑を浮かべた。

「あとふたりの職員と交代で担当しているんです。看護師というより、どちらかといえば保育士ですよ。子守りみたいなものです」

とはいえ、かなりの負担だろう。年齢も病気もまぢまぢのこともたちと付き合うのだ。

「わたしの息子も以前ここにお世話になったんです。それで、恩返しみたいに手伝うようになって、もう十年です」

明美はただうなずくだけにとどめた。「以前お世話になった」という息子のことは聞くまでもないと思えた。だからこそ、ここでももたちの面倒をみようと考えたのに違いない。

自分も同じだと明美は思った。

父親が地下鉄の運転士だったことや恋人の**場的場要**まとはよういちが地下鉄構内で殺されたことが、この仕事を選ばせたのだ。

やむにやまれぬ思いがあつて仕事を選んだということなのだろう。金が稼げるからといってやりたくもない仕事をしているより、やりがいがあるともいえる。

高倉の姿を目にしつつ、明美はそんなことを思っていた。

四

翌日から明美は、表参道駅を通る三路線を受け持ち、通過するごとに表参道で降りて、トイレの周辺に記憶にある女性が来ていないか注意を払うことになった。

だが、それらしき姿に出くわすことはなかった。

一方で、その後も何度か病院に足を向け、マリアの様子を見舞った。高倉がいるときには長期入院のこどもたちのところにも顔を出した。

自分のかかわった一件にのめりこみすぎるのはまずいと、以前奥野に忠告されたことがあったが、かといって置き去りにされた赤ん坊を病院に渡して、あとは関係ないと澄ましていることは、どうしてもできなかった。

それに小児病棟にいるこどもたちのことも頭から離れなかった。健康ならどこへでも行きたいときに行ける。地下鉄に乗りたいたいなら、乗れる。毎日通勤や通学でうんざりしつつ地下鉄に乗っている乗客もいるだろう。

だが、小児病棟にいるこどもたちは乗りたくても乗れないのだ。誰もが当たり前に行っていることができないことのもどかしさが、明美にはわかる気がした。いや、じっさいにはわかっていないのかもしれないが、理解しようとしたかった。

「あー、それわかるよね」

遅番が終わったあと「エルニーニョ」に集まったとき、つい明美が漏らすと、原口由紀が大きくうなずいた。

「なによ、あんたわかるの」

町田光江みつえがいつものように突っ込みを入れた。

「わかるよ。高校のときき、成績いっつも平均行かなかったから」

自慢じまんげに原口が言って、煙草たばこの煙を吹き上げた。

「なんだ、そういうことか」

「でも、そういうことですよ」

応援を求めるように原口が顔を向けると、ちよつと考え込んでから奥野はうなずいた。

「そうね。できることが少ないと、ほかの人より劣っているって見られがちだし、駄目だめな人って見下されることも多いかもしれないわね」

「それならわかる。劣つてて駄目な人ね。よくわかる」

なかば冗談で町村が含み笑いとともに原口を見た。

「はいはい。なによ。たしかにそうかもしれないけどさ。べつに困つてないし」

「そう。当人はべつに困ったりしてないし、そういう人生だつて思つて割り切つていると思う」

奥野の言い方には続きがあるように感じられ、明美たちは視線を注いで待った。そういう呼吸は、半年以上も二日おきに酒を酌くみ交わしていればわかつてくる。

「駄目なところや劣つているところなんて、誰でも持っているし、

自分ではどうにもならないものだってあるでしょ。それと同じはず
なんだけど、なぜ普通の人と同じじゃないから駄目って思うのか、
その人を見下すのか」

「そりゃたしかにおかしいよね。劣ってて駄目かもしれないけど、
見下したりするつもりはないしね」

「それはありがとうございます」

町村の言葉に、原田がバカ丁寧ていねいに頭を下げた。

「でも、そういう風にしか見ない人もいる」

苦々しげに奥野がつぶやいた。

「それって、わたしたちの見方の問題ということですか」

明美の問いに、奥野が続けた。

「難病のこどもがいる。それをなんとかしてあげたいって思うのは、
べつにいけないことじゃない。ただ、かわいそうって感じて、なん
とかしたいと思うのは、ちよつと違う気がするのよ」

はっとした。「かわいそう」と思うことは、相手を見下している
ことになるし、自分より低く見ていることにもなる。むろんあから
さまに見下すのは論外だが、もしかすると自分も無意識のうちに
「かわいそう」と思うことで見下していたかもしれないかった。

腕組みした原口が、しばし考えて口を開いた。

「まあたしかに、かわいそうっていうの、馬鹿ばかにされてる気がする

よね。平均以上の人に引け目は感じてるかもしれないけど、だからって憐あわれまれても大きなお世話だし」

「なにかできないことがある人がいれば、できる人が手助けする。

それだけのことだと思うのよ。でも、見下したり憐れんだりする気持ちがあるのと、善意が善意じゃなくなる」

奥野が視線を遠くにやりつつ、つぶやいた。

「あと損得だよね。他人を損得でしか見ないやつら」

町村がグラスをあおつてため息をついた。

たしかに、損得でしか物を考えないのも「かわいそう」とは別かもしれないが、相手を人とみなしていないかもしれないなかった。

「でも、まあ、こんなわたしでも」

重苦しくなりかかった雰囲気を振り払うように、原口が片手で長い髪の毛をさっと払った。

「この美貌びぼうがあるからさ」

それを見て、とっさに町村がパーマでまとめた髪の毛にもかかわらず、さっと片手で払った。

「同じく」

奥野も短くした髪の毛を払った。

「ですね」

明美もやらざるを得なかった。肩のあたりに片手をさっとやった。

だが、言葉が出てこなかった。

「ええと」

「ノリ、悪いよ」

町村が肘でわき腹をつついてきた。

「すみません」

「ていうか、美貌じゃないよね。どっちかっていったら、カワイイだし」

原口の言葉に、ほかのふたりが笑いながらうなずいた。明美は首を縮めて小さくすみませんとまた答えた。

その日から、明美の中では少しだけ人に接するときの姿勢が変わったようだった。

自分のかかわった一件にのめりこみすぎるのがまずいという奥野の言葉を、もう一度かみしめた。

警備の仕事をしていると、トラブルの仲裁ちゆうさいに入ったとき、先入観でものごとを判断してしまうことがある。外見や物言いといった印象で、本来は非がないのに、その人に非があるように思い込んでしまうような場合だ。警備員だからといって、自分が特権を持っていると勘違かんちがいしてしまうこともある。

間違った正義感とでもいえるだろうか。

自分のやっていることが正しいと思ひ込むことの怖さを教えられた気がした。

行動に移す前に、いったん立ち止まって自分の判断が正しいかどうかをみずから問う。

それが大事なだろうと明美は実感していた。

ただ、それからしばらくはそんな判断をする場に出くわさないまま、警備の仕事は続いていった。

表参道駅のトイレを見て回ることも続いたが、それらしき人物は現れない。

そのうち、マリアが病院から施設に移されることになったという知らせがあった。施設に行けば、里親に引き取られていく可能性も出てくる。すぐというわけではないにしても、そうなれば生みの親と永久に会えなくなってしまうことになる。

「どこも悪くないと病院としても長くは預かれないですしね」

訪ねて行った明美に、高倉は申し訳なさそうにそう言った。

すでに保育器からは出されて、小児病棟の別のベッドに移されていたマリアは、両手両足を元気に動かし、覗き込む明美を珍しそうに見ていた。

「むずかかって泣いたりせんせんしないらしいんですよ。手間がかからないし、ここで面倒見てあげてもいいんだけどって言ってるんで

すけど」

とはいえ、金銭が発生することだから、しかるべき施設に移すしかないという。

「明日施設の職員さんが来るそうです」

「母親を見つげようと頑張ってはいるんですけど」

明美は無力感とともにつぶやいた。どうにかしてやりたいが、費用を肩代わりするわけにも行かない。のめりこむというのは、その相手に対する責任を背負うことでもある。

その責任を引き受けるだけの覚悟もないのなら、簡単にのめりこむべきではない。

あらためて明美はそのことを実感した。それは、安っぽい同情や憐れみが、どれほど相手を傷つけるかということでもあった。

小さな手を取り、何度か揺すってお別れをした。

「萌香ちゃんにも会っていつてください。あの子、アメリカで心臓の手術が決まったんです」

近いうちに両親とともに渡米するという。集まった募金で手術ができることになったらしい。ただし、手術が成功するかどうかは半々だそうだ。

高倉とともに小児病棟に行くと、萌香が「ミヤビくん」を両手で自分の前に突き出し、熱心に話をしていた。何を言っているのか小

声でわからなかったが、入っていった明美を認めると、前歯の抜けた顔が笑いかけてきた。

「萌香ね、アメリカ行くの」

「よかったわね。元気になって帰ってきてね」

「お姉ちゃんのように走れるようになれるといいな」

明美がマラソンの選手だったことや、いまでも走っていることは、何度か来ているうちに話していた。

「そうだね。そしたら一緒に走ろう」

「ミヤビくんも走るって」

萌香は「ミヤビくん」の頭を持って、うなずかせた。

「頑張ってるね」

「うん」

手術が成功するかどうか半々だということは、本人には知らされていないのかもしれない。

安っぽい同情や憐れみではなく、心底頑張ったと言ったつもりだ。だが、手術をするのは明美ではない。その責任を明美には引き受けられない。

のめりこむのにも、限界があるのだ。

萌香とのやりとりは、明美にそんなことを思い知らせた。

父親の法事が執り行われた日は、ちょうど非番にあたっていた。

まだ残暑が厳しく、寺で法要をおこなったあと、青山墓地にある穂村家の墓に参り、参列者が予約した宴会場に着いたときには、暑さでどの顔もぐったりとしていた。

会場の正面に作られたテーブルには父の遺影いせいが立てかけられ、日本酒を注いだグラスがその前に置かれた。

父は酒は付き合い程度で、家では一切飲まなかったが、そういうことを口にするのは野暮やぼというものだろう。

家から持ってきた遺影は、いつもは仏壇に立てかけられているもので、明美も見慣れたものだったが、家を出てから目にしたのは初めてで、新鮮な気がした。運転士の制服を着け、口を引き結んでい。身分証に使っていた写真だから、亡くなる少し前のものだ。

司会がいるわけでもないから、母が挨拶したあと、かつての地下鉄職員の同僚が音頭をとってビールで献杯となり、そこでやっと明美もほかの客と同様、ひと息つけたような具合だった。

食事と雑談になって、明美は母親の代わりに酒をつぎつつ挨拶をして回った。

亡くなって十七年過ぎてもかつての同僚が法事に来てくれるというのは、人望があつた証しだと口にした客がいた。

たしかに、そうかもしれない。顔には出さなかったが、明美は内心誇らしかった。

目下地下鉄で警備員をしていることは、参列した三木統括官から聞いたのか、全員が知っていた。だが、的場要一が殺されたことまで知らされていない者は、「同情」や「憐れみ」というより、単におせっかい的な好奇心から「早いところ結婚したら」といった無神経な言葉を投げかけてきた。

なるほどそういうことかと、マリアの置き去りから続く一連の出来事を通して、認識を新たにしたもろもろが実感された。

会は二時間ほどお開きになった。

これからどこかへ飲みなおしに行こうと話している者や、母の郷里である長野から出てきた親戚たちを送り出し、最後に三木だけが残った。

人がはけるのを待っていたのかどうかわからないが、喪服姿の三木が明美と母の前に来た。

母が恐縮しつつ、娘は仕事がきちんとできているのかと三木に尋ねた。

「もちろんです。なかなかたくましいですよ」

いかつい顔つきがほころんだ。

目の前で言われる明美の身にもなってほしかったが、首をすくめて黙っていた。

お茶でもどうかという母の申し出を断った三木は、明美に顔を向けた。

「それじゃまた明日」

「ありがとうございました」

明美はそれだけ言って頭を下げた。

三木の背中を見送ったあと、母とともに会場を出た。

互いに口を開かないまま、渋谷の駅へ向かう坂を下っていく。

勤務する渋谷の詰所からも近くだし、見慣れた風景だったが、やはり父親の法事のあとのせいか、もの寂しい気がした。

「ちよっと休んでいこうよ」

立ち止まった母が、横にある喫茶店を目で示した。明美はうなずき、先に立って店に入ってしまった。

窓側の席に母と向き合って座ると、まずは母が背もたれに身体をあずけ、苦笑をもらした。

「前のときはそうでもなかったけど、やっぱり歳ね」

あつげらかんと言い放つところをみれば、さほどこたえているようにも感じられない。とはいえ、もう五十なかばだ。顔を合わせな

くなつてから半年以上が過ぎ、ひさびさに母を目にすると、歳を取ったという印象が強い。顔は化粧でごまかしているが、喉首のどぐちのたるみまでは無理なようだ。

思わず自分の首筋に手をやっていた。そのしぐさを気取られないように、ごまかすつもりであわてて尋ねた。

「いくつになつたっけ」

「三十七。そのあとは数えてない」

何度も聞かされた答えがまた出た。

父が亡くなつたとき、母は三十七だった。だから足せばすぐに歳がばれる。操みさおを立てていると言いたいのだろう。

今度は明美が苦笑した。

町村光江の顔がよぎつたのだ。ちやうど同じ年齢だった。とすれば、まだまだ母は若々しいか。

すぐにアイステイヤーがふたつ来て、互いに喉をうるおす。会場は冷房が効いていたが、ここまで来るあいだの西日がひどかった。酔い覚ましの意味もある。

「でも、ほんとに仕事きちんとやっているようでよかった」

「娘の言葉を信じないで三木さんから聞いて信じるって、どうかと思っただけ」

「だって何考えてるのかわからないもの。ひとことも説明なしに教

師になるのやめて、どうするのかと思ったら警備員でしょ。そりや
要一さんのことがあったのは残念だったけど、なにも派遣みたいな
ことしなくても」

「派遣だって立派な仕事よ」

「そりやそうだけど」

まだ言い足りなさそうな顔をしたが、そこで母は黙ってストロー
に口をつけた。

早いとこ結婚して安心させてよ。

そう言いたかったのに違うない。

要一を殺した犯人を見つけ出すためにこの仕事についたなどとい
うことを母ばかりか、誰にも話したことはない。呆れられるだけだ
とわかっていたからだ。急に教師になるのをやめたのは、単に要一
が殺されたショックからだろうと周囲は見ている。

犯人を捕まえないかぎり、自分は前に進めないのだ。むろん結婚
など考えられるはずもない。

「ところでちゃんと聞いたことなかったけど、三木さんと父さんて、
どういう知り合いなの」

さっさと話題を変えようとして、明美は何げなく尋ねた。

「言ったじゃないの。大学のときの友達よ」

「それは聞いたわよ。もう少し詳しく」

母はアイステイーを飲みながら、肩をすくめた。

「じつはよく知らない。というか、あまり父さんも話したがらなかったのよ」

「なぜ」

「仲は良かったらしいの。でも、何かあって、あんまり仲良くなかった。それくらいしか話してくれなかったわね」

ちらりと手荷物の中にある父の遺影に目を落とした。

「大学を卒業してからは、ぜんぜん会っていなかったみたいよ。でも、ばったり顔を合わせたんだって。サリン事件のとき」

明美の生まれる一年前の話だ。カルト集団が地下鉄の路線にサリンをばらまいたテロ事件があった。死者十四人、負傷者は六千人にのぼるといわれた。

当時のニュース番組などをテレビで繰り返し放送するし、ネットにも事件を考察するような動画がいくつも上がっている。

しかも父の働いていた地下鉄での出来事だから、明美もよく知っている。

「あのととき、父さんは渋谷行きみつきしまえの銀座線を運転して三越前まで来たのよ。そこで地下鉄はストップして、最初は爆弾が爆発したっていう話だったらしいの。情報が混乱していたのよ」

ともかく大きな事故が起きたのはたしからしい。そこで各駅から

地下鉄職員も救助に向かった。現場は広範囲だったが、父は霞ヶ関駅に地上から車で駆けつけた。

そこには警察と消防の車両が入り乱れ、道路にはへたりこんでいる者が大量にいた。

なにが起きたのか、まるでわからない。駆けつけたはいいが、自分たちに何ができるのか、警察関係者らしい者に声をかけた。

それが三木だったというのだ。

互いに一瞬顔を見合わせたが、きゆうかつ久闊をじよ叙する暇もなく、互いがどういう職についていたのかを確認し、三木に頼まれて倒れている者の介護をしたらしい。

「そのときはそれきり会えなかったらしいけど、半年ほどして三木さんが職場に会いに来て、それからまた付き合いが始まったというわけ」

かなり詳しく話を聞いていると思えたが、にもかかわらず、母にも三木と仲違なかがいしたらしい一件は頑として教えてくれなかったようだ。

いったい何があったのか。

すでに父が亡くなってしまっているいま、知りたいなら三木から聞き出すしかないということだ。

もちろん機会があればの話だし、父同様に三木もまた口を閉ざす

かもしれないが。

六

翌日、そんなことなど知らぬげに三木に点呼を受け、勤務についていたのだが、昼過ぎになって無線で渋谷詰所に連絡を入れるようにという指示が入った。

乗っていた車両を降り、ホームで渋谷詰所に電話をすると、三木が出た。

「いまだこかな」

「千代田線の湯島ゆしまですが、緊急ですか」

「表参道の一件なんだが」

「見つかったんですか」

急き込んで尋ねると、三木は聞こえなかったように続けた。

「湯島か。それなら現地で会おう。三時に高津駅たかつの改札に来てほしい」

「高津。田園都市線でんえんとしのですか」

「そうだ。詳しい話は現地で」

返事を待たずに通話が切れた。

腕時計を見ると、二時を過ぎたばかりだ。余裕で行ける。はつき

り答えなかったが、表参道の件というからには、マリアの母親が見つかったのに違いない。

とすれば、明美の予想は外れた。おそらく表参道からそう遠くない場所に居住しているはずと考えていたから、高津駅と聞いて意外だった。

東京の地下鉄は周辺の私鉄と相互乗り入れをしているものが多い。半蔵門線と東急田園都市線もそのひとつだ。

つまり、マリアを置き去りにした人物は、直通運転の車両に乗ってわざわざ表参道まで来たということになる。

そのあたりの事情がどうなっているのかも、三木と合流すればわかるだろう。

明美はちょうどホームにすべり込んできた伊勢原行と表示のある千代田線に乗り込んだ。おおてまち大手町で半蔵門線に乗り換えれば、そこから一本だった。

明美たち警備員は車両と違って基本的に私鉄路線には立ち入らないことになっている。だから半蔵門線も渋谷まででいったん下車して反対方向に乗り換えるのが通常だった。

だが、きょうは渋谷で降りることなく、明美は車両とともに田園都市線へと乗り入れて行った。

最初は地下を走っていた車両は、二子玉川駅ふたこたまがわに到着する直前に地

上に出た。高架橋こうかきょうの上に作られているホームからは多摩川が見える。川の向こうは神奈川県だ。

夕方から雨と予報されていたが、早くも小雨が降り始めていた。半袖のポロシャツ一枚では肌寒いくらいだ。

ここから各停に乗り換えて多摩川たまがわを渡ったところが二子新地ふたこしんち駅になっている。そのつぎが高津駅で、このあたりはずっと高架橋を列車は走っていく。

五分とかからず高津駅に到着した。

改札を出たところに、背広に着替えた三木が立っていた。

「お待ちせしました」

振り返った三木が、重々しくうなづく。

「母親と思われる人が見つかったよ」

思われる、という言い方が気になった。

「ともかく、行こう」

明美はデイパックの中から折り畳み傘を取り出した。

先に立った三木について駅の前を右に進んでいくと、すぐ右手に見えてきたのは高津署だった。

傘をさしていた三木が入口のところで立ち止まり、振り返った。

「表参道で赤ん坊を置き去りにしたと思われる女性は、ここにいる」

「逮捕されてるんですか」

「保護、というべきかな」

答えるとふたたび歩き出し、玄関に向かっていく。むろん、明美もそれに従った。

受付で三木が案内を乞うと、待ちかねていたのか、手にファイルを持った男がすぐに階段を降りてきた。

「ご足労おかけします」

スーツ姿の男は、深々と頭を下げた。四十前後だろうか。少し疲れたような気配があった。

刑事課の加藤文彦かとうふみひこと名乗った。

「こちらが目撃したという穂村警備員です」

三木がそう紹介したあと、加藤は明美たちを二階に案内した。取調室ではなかった。来客用の応接室のようだ。

ソファに座るよう促され、女性警官が茶を出してくれた。

「さっそくですが」

向き合って座った加藤がファイルを両手に持ち、身体を乗り出した。
てきた。

「昨日の夜、管内で一一〇番通報がありました、交番勤務の警官が駆け付けたところ、アパートの一室でDVを受けている女性を保護しました。通報は近隣住民からのものです」

いままでも何度か通報が入ったことがあったが、毎回なんでもな

い、ただの言い争いだと男がこたえ、女の方もそれに従うようにDVであることを否定していた。

「夫婦、というより内縁関係のようでした、半年前に生まれたばかりの赤ん坊を連れて越してきたらしいんです」

警官は赤ん坊がいることは承知していたが、昨日は泣き声が聞こえなかった。赤ん坊はどうしたのか尋ねると、親戚の家に預けたと男がこたえた。

その口調に違和感を感じた警官は、なにかまずいことが起きているのではないかと疑い、応援を呼んでDVの容疑でふたりを高津署に連行した。男は逮捕、女は保護された。

そこでふたりの身元が明らかになった。

男は工事現場を転々としていたようだ。女のことば女房だと言っていたが、フィリピンから出稼ぎに来て大阪のパブで知り合い、そのまま連れまわしているうちにこどもができてしまったらしい。

ただ、警官は昨日の時点まで、ちよつと訛りなまはあるが、女性は日本人だと思っていたという。名前もエリカと日本人風の名前を名乗っていた。

「二年前から、オーバーステイになっています」

つまり、日本での滞留期限が切れているというのだ。

つづけて、加藤がファイルに目を落とし、説明をつづけた。

「品川の東京出入国管理局に問い合わせたところ、名前も判明しました。エリカは本名でした。フィリピンの女性にはよくある名前のようなです。エリカ・ジョンソン。二十七歳。韓国人の父とフィリピン人の母のあいだに生まれていて、国籍はフィリピンです。技能実習生として入国しましたが、職場から消えています」

「消えた、という」と

三木が初めて口を開いた。

「つまり、逃げ出したようです。賃金の支払いをしてもらえず、休日は月に一日か二日、残業も毎日六、七時間やっていたと言っています」

「ひどいな」

「まったくです。逃げ出したくなって当然でしょうね。たまたま男に拾われて、なんとか生きてきた。ところが、その男がDV男だった」

「なるほど」

「そこで表参道駅に赤ん坊を置き去りにしたというわけですね」

「いや」

明美の問いに、加藤は言いよんだ。

「ふたりのあいだに赤ん坊がいたのは事実です。住民の何人もがその姿を見えています。ですが、昨夜警官が駆けつけたときに、赤ん坊

はどこにもいなかった」

まさか男が答えたように親戚に預けたはずもない。いったいどこへやってしまったのか。周辺に聞き込みをすると、九月十五日の日曜日にエリカが赤ん坊を抱え、最寄りの二子新地駅から田園都市線に乗ったのを目撃したという者が出てきた。夕方だったという。そして、それ以後、赤ん坊の姿を目にした者はいない。

「彼女が東京方面に行ったのはたしかなのですが、赤ん坊がどうなったのか、わからない。彼女が赤ん坊を連れて出たのなら、どこかに置き去りにしたに違いない。警視庁で事件になっているはずと踏んで問い合わせをしたところ、赤ん坊の置き去りが同じ日の夜にあったとわかりました」

「では、エリカさんが置き去りにしたのは確実です」

いまさら明美を呼びつけるまでもないだろう。

だが、明美の返答に、加藤は困惑したように顔をしかめた。

「本人は置き去りなどしていないと言いつ張っているんです」

「どういうことですか」

「当日、自分は表参道など行っていない。赤ん坊も連れていなかった。自由が丘じゆうがおかに行つて服を買ってきただけだ。そのあいだに同居した男がどこかへ連れ去つたに違いない」

「そんな」

「男に問いただしても親戚に預けたの一点張りです。厄介払いできたくらいにしか考えていないらしい。そこで目撃者である穂村さんに来ていただいたわけですよ」

明美は隣に座っている三木に視線をやった。

「その女性だったかどうか、確認してほしいというんだ」

七

ドアがノックされ、女性警官に連れられて入ってきた姿を見て、息をのんだ。

右目からこめかみにかけて青黒くなった痣あざがあったし、唇も腫れあがって血が固まってこびりついている。水色の長袖トレーナーにも、血が点々と残っていた。足も少し引きずっているようだ。

明美はDVを受けた当人を初めて目の当たりまにして、言葉を失っていた。

エリカは部屋にいる者を警戒する様子で見渡し、明美の顔を見ても、特に反応を示さなかった。

「いかがですか」

加藤刑事が明美に尋ねた。

見るのはつらかったが、あらためてエリカの様子に視線を向けた。

挑むいどような目が、明美を見返してきた。

目撃したときは髪の毛で隠れていたが、いまは後ろでまとめているから顔の輪郭りんかくがはっきりしていた。頬骨が高いのは似ていたが、確信を持ってない。声を聞ければ。

「こんにちは」

声をかけたが、エリカは軽く頭を下げただけだった。

「穂村明美といいます。表参道駅でマリアを見つけました」

一瞬、表情にひるんだ気配があった。だが、首をかしげるだけだ。

明美は加藤に声をかけた。

「ふたりだけで、話してもいいでしょうか」

エリカに視線を向けつつ、明美は言った。置き去り事件の当日「すみません」というひとことしか聞いていなかったが、声さえ聞ければ。

加藤が、三木にどうすると尋ねるような目を向けた。

三木は黙って立ち上がり、部屋を出て行こうとする。

「では、少しだけ」

加藤が応じ、部屋にいたほかの者も出て行き、ドアが閉じられた。

明美は立ち上がり、エリカに近づいた。

「わたしのこと、覚えていませんか。トイレの入り口でぶつかった」

「知りません。あなたと会ったこと、ありません」

エリカがドアの方を気にしつつ、ひそめた声で告げた。

ハスキーな高めの声。

やはりマリアの母親だ。しかし、問いただしても拒否するに違いないと思えた。

なぜ置き去りを否定するのか。男がマリアを邪魔者扱いし、仕方なくそれに従い、置き去りにしたのかもしれない。DV被害者は加害者に逆らえない精神状態に追い込まれると聞いたことがあった。

「そうですか。人違いでしたか」

「そう。あなたのこと知りません」

あくまで否定するつもりらしい。明美は口調を変えた。

「それならそれでいいんです。でも、ひどい親ですよね」

ずっとエリカの表情が強張った。

「赤ん坊を置き去りにするなんて、ひどいってことです」

さげすむような明美の口ぶりに、エリカはきつと睨みつけてきた。

「そんなことないと思います」

「なぜですか」

「事情があったんじゃないですか」

「どんな」

「たぶん、一緒にいるとまずいことがあったんじゃない」

「あなたのようにですか」

そう前置きして、明美は自分の推測を口にした。

男に助けられ、生活するうちにマリアが生まれた。男が暴力を振るうことはわかっていたが、パスポートを取られてしまっていて逃げ出せなくなっていた。

暴力を振るわれても、警察に駆け込むことはできない。救いを求めればオーバーステイがばれる。

もし、そうなったとき、マリアを暴力男のもとに置いたまま、エリカはフィリピンに強制送還されてしまうことになる。

「だから、万が一のために、あなたはマリアを置き去りにした。違いますか」

エリカは視線をうろつかせ、首を何度か振った。

「それ違います。わたしと関係ない」

あくまで否定しようとしていた。だが、事態は明白だった。

結局、エリカの予想が現実になってしまったわけだ。

暴力男は逮捕されているが、エリカの身柄も入管に移送され収容されてしまう。強制送還は確実になってしまった。ただ男が起訴されず、釈放されれば、マリアは施設から男の手に渡ってしまう可能性もあった。

暴力男から逃げるためには、母と子が離れ離れになり、マリアは施設で面倒をみてもらうしか方法はないのだろうか。

もし明美がいま、エリカがマリアの母親であると証言すれば、マリアは男のもとに行ってしまうかもしれない。しかし、逆に母親ではないと証言したら、エリカは二度とマリアに会うことはできない。エリカの嘘を追究しようとしていた明美は、自分が置かれた状況に言葉を失った。

「その赤ちゃん、どうになりましたか」

自分に突きつけられた責任に圧倒されていた明美に、エリカが尋ねてきた。すぐるような目には涙が浮かんでいた。

「施設に送られて、そこで生活しています」

エリカが目をつぶり、両手を胸の前で組んだ。祈りを唱えているようなしぐさだった。

「よかった」

「そんなに心配ならなぜ」

「知りません。わたしは何も知らない」

強い口調でまた否定した。

それがエリカの思いなら、明美の立ち入る余地はなかった。

傘をさして高津署を出ると、ずっと黙りこくっていた三木に尋ねた。

「これでよかったんでしょうか」

わずかに傘を傾け、三木が横に並んだ明美に視線を向けた。だが、すぐに目を伏せた。

「わからない。わたしにも」

その横顔が苦しそうに歪んでいた。見たことのない表情だった。

「ただ、これだけは言える。赤ん坊を置き去りにしたのはたしかだろうが、そうせざるを得ないように追い込んだのはほかの何かだということだ」

「同居していた男ということですか」

「そうじゃない」

怒ったようにそれだけ言って、三木は傘を戻すと先に立って歩き出してしまった。

明美は振り返ると、いま出てきた警察署に目をやった。

さっきの証言は間違いでした。マリアの母親はエリカです。ほかの誰でもありません。たとえ今は離れてしまったとしても、いつか再会できる日のために、それだけははっきりさせておきます。

駆け戻ってそう言いたかったが、もはや遅かった。

あきらめて、明美は先を行く三木のもとに走っていった。

(つづく)